



ひと
その
あしあと

人生の暗闇にも届く 神の愛、つつみ込む光

今月のひと——オルガニスト 内海恵子さん

試練も人生とオルガニストの円熟に変えてくださった神さま

何百年も弾き継がれ、賛美されてきたクラシック音楽も、奏でる者によってその音は色を変え、新たな響きをもつ。オルガニスト・内海恵子さん（ホーリネス・池の上キリスト教会員）の演奏は、力強さだけではない包み込む優しさ、そして希望を感じさせる。それは研さんを重ねた技術がもたらしたものでではなく、内海さんの人生によって彩られた音色でもある。

悲しみのとき心に響いたパイプオルガンの音
五代続くクロスチャンホームに生まれ育ち、幼い頃から教会音楽に慣れ親しみ、ピアノを習った。音楽が大好きで「いつかは教会のオルガニストになりたい」と思っていたが、十歳の時に突然事故で父を亡くし、「病を癒す医者になりたい」という思いも心に芽生えた。同時に「神は大切な父をなぜ取り去ったのか」という疑問が中学時代は強く胸に迫り、教会より勉強を優先させる日々だったという。転機が訪れたのは、進学先の高校で、父の葬儀以来再びパイプオルガンと出合ったことだった。「父の葬儀で初めて聴いた穏やかなパイプオルガンの音色は、悲しみに沈む私の心を温かく包み慰めてくれました。祈りの中でこの高校に導かれたことは、教会のオルガニストとなることを神さまが示してくださったことだと確信し、十五歳でパイプオルガンを習い始めました。その年に洗礼を受け、教会生活



教会の音楽主事、オルガニストも務める。

学校生活、そしてオルガンの練習に明け暮れる充実した高校時代を過ごした。身長百五十七センチで華奢な内海さんは、パイプオルガンを弾くのに不利な体つきだったが、努力と研さんを積み、東京芸術大学器楽科オルガン専攻に合格。大学院在学中にドイツ政府給費留学生としてケルン国立音楽大学で学び、現地ドイツの教会の正オルガニストも務めた。ドイツでオルガニストとしての確かな評価を得て一九九三年に帰国し、翌年大学院を修了した。日本でオルガニストとしてどのような活動をさせていたのか祈り求めていたところ「神さまの不思議なお導きで」、新会堂建築とパイプオルガン選定のためにオルガニストを探していた池の上キリスト教会に導かれ、同教会の

一方で人間関係でもいくつもの試練があった。「神さまに感謝をすることも、祈ることさえ出来なくなってしまう」ときももあったという。いつまでもこの暗闇のようなトンネルは続くのだろうか、何度も絶望しかけたが、家族や牧師に相談する中で少しずつ解決の道が与えられ、やがて光が見えてきた。つらかった時期に、ちょうど旧約聖書のヨブ記からメッセージがありました。そこから聖書のことばに堅く立たなくては立ち上がれないという確信を得ることができました」

残ったのは「信仰、娘、オルガニストの道」
人生に嵐が吹き荒れた後で残ったのは「信仰と一人娘と

オルガニストとして迎えられた。活動の幅は徐々に広がり、結婚・出産し順風満帆に見えた。だが、突然の病に襲われて手術、また二度の流産も経験し、肉体的にも精神的にも大きなダメージを受けた。そのような中で、教会に与えられたライル社製オルガンの音色を紹介するべくCD製作の計画が進んだ。「神さまに賛美をする器として整えてくださいと祈りつつ準備を進める中、安らかで時に力強いオルガンの音色に私自身が慰められて、二〇〇三年にCD『天からの風に乗せて』が完成しました。神さまに賛美のCDをお捧げできたことは心からの感謝でした」

今年、創立五十周年を迎える池の上キリスト教会の記念に製作したアルバムに「光にまつまれて」というタイトルをつけた。様々な試練の中になんか、は、闇の中にいるようでしたが、実は、神さまの大きな愛に生かされ、その光に包まれていると気がついたので。その光の中をこれからも歩んでいきたい」と内海さん。

●ここに通信文を書くところ3種郵便物の扱いになりますのでご注意ください